特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について

About the child care difficulty feeling on nursery teacher's business in the special support education age

吉兼伸子[1)]，林　　隆[2)]
Nobuko Yoshikane，Takashi Hayashi

英文要旨

The questionnaire survey about "embarrassment feeling" of the nursery teacher who took charge of the child with the behavioral traits of the developmental disorders was done. Subjects were 15 nursery teachers and 17 kindergarten teachers who participated in the training seminar of developmental disabilities for school teachers in the Yamaguchi Prefectural University.

Most nursery and kindergarten teacher felt generally the presence of the children with the behavioral traits of the developmental disorders in their institute. Only half of the children had be diagnosed as developmental disorders. Official support for the nursery institutes were more abundant than for kindergarten. The kindergarten teacher and the nursery teacher had the knowledge of the attention deficit hyperactivity disorder (ADHD). However, the supporting action for the children with ADHD was difficult in both teachers. The scores of burnout index in the kindergarten teachers having the classes was higher than that of the nursery teacher with the classes. The scores of all sub-categories of the burnout index in the nursery teachers having the children, diagnosed as the developmental disorders, were higher than those of the kindergarten teachers.

要約

発達障害の行動特性のある子どもを担当する保育士の「困り感」について、山口県立大学キャリアアップセミナーに参加し、調査・研究へ協力の得られた保育士15名・幼稚園教諭17名を対象に無記名のアンケート調査を行った。保育士独自の課題を明らかにするために、同様の指標を調査した幼稚園教諭の結果と比較検討した。

その結果として、保育士･幼稚園教諭が発達障害の行動特性と感じる子どもは保育所･幼稚園に一般的に存在し、その子どもの約半数が診断を受けていた。加配については保育士が充実していた。注意欠陥多動性障害では幼稚園教諭・保育士ともに知識がある割に対処の実践が困難な様子が伺えた。バーンアウトについては、担任を持っている幼稚園教諭のバーンアウト指数が担任を持っている保育士より高かった。発達障害の診断をうけている子どもを受け持つ保育士と幼稚園教諭では、バーンアウト指数のすべてが幼稚園教諭に比べ保育士が高かった。

Key　words: developmental disorder,nursery teacher, sense that feels difficulty in child care burnout,

Key　words: 発達障害、保育士、保育困難感、バーンアウト

はじめに

近年の特別支援教育体制の整備により、小中学校において校内委員会やコーディネーターの設置率が90%を越えている。反面、保育所や幼稚園では、施設内委員会やコーディネーターの設置率は約30％台と支援体制の遅れが指摘されている[1)]。保育現場では発達障害の行動特性（以下発達障害特性と称する）を持つ子どもへの対応に苦慮しているが、情報不足や公的な支援が十分にうけられない現状であることが想定される。

池田[2)]の調査で、経験5年以上保育士の75%が気になる子どもの増加を感じている。郷間[3)]らは、保育士の障害児担当経験は67.3％であるのに対して、気になる子どもの担当経験は88%と気になる子どもの担当経験が有意に多いことを示している。前述の池田の調査で気になる子どもの特性として話の聞けない子、多動で落ち着きのない子、切れやすい子、未熟な生活習慣の子、集団活動が苦手で参加できない子、感情が不安定である事をあげており、これらの症状は発達障害特性と酷似している。保育現場は、発達障害特性のある子どもへの対応に苦慮し、支援やサポートがうけられない現状であることが伺える。

日々の保育業務において発達障害の行動特性をもつ

[1)] 山口県立大学大学院健康福祉学研究科　博士前期課程
[2)] 山口県立大学大学院健康福祉学研究科

子どもに対して、定型的な発達の子どもの保育経験では対処困難な保育状況が生じており、身体的精神的ストレス症状やバーンアウト状態にある保育士も存在すると考えられる。そのストレス要因として、発達障害特性の理解、対処・実践方法についての知識の不足、発達障害特性をもつ子どもとその保護者の行動特性による負担感、加配の不足などが考えられる。

今回は想定されるこれらの要因をもとに、発達障害特性のある子どもを担当する保育士の「困り感」について、対象児の発達障害特性とその保護者の行動特性や保育士全般と発達障害の診断を受けた子どもを担任する保育士のバーンアウト指数を用いて検討した。保育士独自の課題を明らかにするために、同様の指標を同時に調査しえた幼稚園教諭の結果と比較検討した。

研究方法

１　対象

平成21年度に山口県立大学主催で開催された「発達障害の理解と支援」について教員・保育士を対象とした研修会（以下、キャリアアップセミナー）に参加し、調査・研究へ協力の得られた保育士15名・幼稚園教諭17名を対象とした。

２　調査方法

無記名・自記式質問紙を直接配布し留め置き法により回収した。

３　調査項目

(1) 対象者の属性について、年齢・性別・経験年数・所属・就業職種等を質問した。

(2) 発達障害特性のある子どもの担当の有無について、担任の有無と担当クラスの年齢を質問した。

(3) 発達障害特性のある子どもを担当している場合は、１名の子どもを特定してもらった上で、その子どもの診断名（疑い診断も含む）を「診断無し・注意欠陥多動性障害（ADHD）・学習障害（LD）広汎性発達障害（アスペルガー症候群・自閉症）言語遅滞・知的障害・身体障害・その他」の中から回答を求めた（複数選択可）。

(4) 発達障害特性の子どもを教育・保育する上での加配の有無について「その子どもさんを教育・保育するために、加配等の配慮がされていますか。」と質問し、はい・いいえで回答を求めた。

(5) 発達障害特性のある子どもに対する精神的負担感について、「そのお子さんの存在は先生にとって精神的な負担である。」と質問し、「全く当てはまらない」「少し当てはまらない」「どちらでもない」「少し当てはまる」「よく当てはまる」の５件法で回答を求めた。

(6) 発達障害特性のある子どもの状況について、担任する子どもの中で発達障害特性をもつ子どもを一人特定して最近の状況（表１）をたずねた。質問項目は、DSM-Ⅳ及び ICD10の診断基準を参考にして、注意欠陥多動性障害（１～６は不注意症状、７～10は多動性・衝動性症状）と広汎性発達障害（11～13意思伝達の質的障害、14～17対人的相互反応の質的障害、18～21は行動興味活動の低下・反復的常同的儀式を示す状況）の特徴について独自に質問項目を作成した。これらの項目を「全く当てはまらない:１」「少し当てはまらない:２」「どちらでもない:３」「少し当てはまる:４」「よく当てはまる:５」までの５件法で回答を求めた。

表１　発達障害特性の最近の症状

質問項目
1　細かいところまで注意が払えない
2　遊びに集中できない
3　話しかけられているのに聴いていないように見える
4　指示に従えず、最後までできない
5　ものをよくなくす
6　忘れっぽい
7　意味もなく席を離れる
8　じっとしているべき時に走り回る
9　質問が終わらないうちに答える
10　順番を待つのが難しい
11　言葉通りにうけとる
12　自分だけにしか分からない造語を作る
13　場面に関係なく声を出す
14　球技やゲームをするときに仲間と協力できない
15　協調性が乏しい
16　友達の側にはいるが一人で遊ぶ
17　仲の良い友達がいない
18　得意と極端な不得意がある
19　こだわりで、簡単な日常の活動ができない
20　自分なりの独特な日課や手順がある
21　特定なものに執着がある

(7) 発達障害特性がある子どもの保護者の状況について

保育士と幼稚園教諭にとって、発達障害特性のある子どもの保護者の存在もストレスの原因になると仮定し、「その保護者の方は教育・保育に非協力的である」、「その保護者の存在は、先生にとって精神的な負担である」について、「全く当てはまらない」「少し当てはまらない」「どちらでもな

い」「少し当てはまる」「よく当てはまる」までの５件法で回答を求めた。その保護者は父親・母親であるかもたずねた。

(8) 発達障害特性がある子どもの保護者の行動特性について

子どもの発達障害特性とその保護者の行動特性の関係を見るために、保護者の行動特性について質問した。注意欠陥多動性障害的行動特性として１～14、広汎性発達障害的行動特性として15～22を質問した。質問項目は、成人の発達障害に関する資料[4) 5)]を参考に独自に作成した（表２）。これらを「全く当てはまらない」「少し当てはまらない」「どちらでもない」「少し当てはまる」「よく当てはまる」の５件法で回答を求めた。

(9) 発達障害の知識・対処・実践について

保育士、幼稚園教諭に「発達障害児の行動特性とその対処法の理解」について、キャリアアップセミナーを受ける以前の認識についてたずねた。注意欠陥多動性障害（ADHD)、広汎性発達障害（PDD)、学習障害（LD）それぞれについて、「行動特徴を知っている」「対処方法を知っている」「対処方法をすでに実践している」の３領域で質問し、「全く当てはまらない:１」「少し当てはまらない:２」「どちらでもない:３」「少し当てはまる:４」「よく当てはまる:５」の５件法で回答を求め、点数化した。

(10) バーンアウト尺度について

日本語版MBI（バーンアウト尺度）はMaslach &Jackson（1981）により作成されたMaslach Burnout Inventory（MBI）を久保他（1994）が翻訳・改訂したもの[6)]で、今回は調査対象者が保育士・幼稚園教諭であるため項目の一部を変更して使用した。「脱人格化（人を人と思わなくなる気持ち）:D」、「情緒的消耗感（心身共に疲れ果てたという感覚）:E」、「個人的達成感の低下（仕事へのやりがい感の低下）:PA」の３因子、17項目（表３）でバーンアウトの状態を感じているほど得点が高くなる。保育士・幼稚園教諭の最近の状況を「全く当てはまらない:１」「少し当てはまらない:２」「どちらでもない:３」「少し当てはまる:４」「よく当てはまる:５」の５件法で回答を求めた。結果の分析にあたり、設問が逆転項目である「個人的達成感の低下（仕事へのやりがい感の低下）:PA」は「全く当てはまらない:１」「少し当てはまらない:２」「どちらでもない:３」「少し当

表２　保護者の発達障害的行動特性

質問項目
1 手続き上の書類に間違いが多い
2 書類の提出期限が守れない
3 話しかけられているのに、聞いてないように見える
4 文章でのお知らせが伝わらず、言葉で伝えることがある
5 約束の時間を忘れがちである
6 物の整理ができない
7 身なりにあまり関心がないようにみえる
8 落ち着きがなく、ゆっくり話を聞けない
9 話している間、視線が定まらない
10 喋りすぎる
11 質問が終わらないうちに答える
12 相談等の順番を待つのが難しい
14 他の保護者と話しているときに割り込む
15 ものへのこだわりがある
16 子どもに対して笑顔がない
17 言動が悪気はないが大げさである
18 他の保護者とあまり話さないように見える
19 自分の考えを押しつける傾向にある
20 共同作業をうまくこなせない
21 話すときに視線が合わない
22 行動に変わったところがある

表３　バーンアウト尺度

質問項目	
こんな仕事もう辞めたいと思う	E
われを忘れるほど仕事に熱中することがある	PA
こまごまと気くばりすることが面倒に思うことがある	D
この仕事は私の性分にあっていると思うことがある	PA
同僚や子どもと何も話したくなくなることがある	D
自分の仕事がつまらなく思えて仕方ないことがある	D
1日の仕事が終わると「やっと終わった」と感じることがある	E
出勤前に、職場に出るのが嫌になって、家にいたいと思う	E
仕事を終えて、今日は気持ちの良い日だったと思うことがある	PA
同僚や子どもの顔を見るのも嫌になることがある	D
仕事の結果はどうでもよいと思うことがある	D
仕事のために心にゆとりが無くなったと感じることがある	E
今の仕事に、心から喜びを感じることがある	PA
今の仕事は、わたしにとってあまり意味がないと思うことがある	D
仕事が楽しくて、知らないうちに時間が過ぎることがある	PA
体も気持ちも疲れ果てたと思うことがある	E
われながら、仕事をうまくやり終えたと思うことがある	PA

D：脱人格化（人を人と思わなくなる気持ち)、E：情緒的消耗感（心身共に疲れ果てたという感覚)、PA：個人的達成感の低下（仕事へのやりがい感の低下)、PAのみ逆転項目で設定

てはまる:４」「よく当てはまる:５」として点数化し、バーンアウト傾向が強い場合に得点が高くでるようにした。

結果

１　属性

(1) 保育士15名（うち担任有り12名）の内訳は、男性１名・女性14名、平均年齢38歳（24～54歳）、平均経験年数20年（2～33年）であった。

(2) 幼稚園教諭17名（うち担任有り11名）の内訳は、女性16名･性別無回答1名､平均年齢41歳(23～68歳)、平均経験年数15年（1～40年）であった。

２　発達障害特性のある子どもの有無と診断名

(1) 保育士：担任有りの12名中11名（91.7％）の保育士が発達障害特性のある子どもを担当していると回答した。11名の子どもの性別は男児9名女児2名であった。診断のついた子どもは６名54.5％であった。診断名（複数回答）については､注意欠陥多動性障害２名、広汎性発達障害５名、言語遅滞２名であった。

(2) 幼稚園教諭：担任有りの11名中９名（81.8％）の幼稚園教諭が発達障害特性のある子どもを担当していると回答した。９名の子どもの性別は全て男児であった。診断のついた子どもは４名44.4％であった。診断名（複数回答）については、診断なし５名、注意欠陥多動性障害１名、広汎性発達障害３名であった。

３　発達障害特性のある子どもに対する加配の状況

(1) 保育士：発達障害特性のある子どもを担任していると回答した11名のうち、加配があると答えた保育士は６名であった。

(2) 幼稚園教諭：発達障害特性のある子どもを担任していると回答した９名のうち、加配があると答えた幼稚園教諭は３名であった。

４　発達障害特性のある子どもに対する負担感

発達障害特性のある子どもにたいする負担感についての質問で「そのお子さんの存在は先生にとって精神的な負担である」という質問項目に対する保育士の回答は「良く当てはまる」２名、「少し当てはまる」３名だった。一方、同じ質問に対する幼稚園教諭の回答は「少し当てはまる」7名であった。

５　発達障害特性の理解・対処の理解・対処の実践について

保育士･幼稚園教諭の「発達障害の行動特性の知識･対処方法・実践」についての認識を、担任の有無を加味して比較した。保育士は、幼稚園教諭に比較し広汎性発達障害（PDD）への知識・対処・実践の全ての領域で点数が低く、広汎性発達障害（PDD）についての認識が低いことが明らかになった。反面、注意欠陥多動性障害（ADHD）・学習障害（LD）に関する認識は知識・対処・実践の全ての領域で、点数が幼稚園教諭よりも保育士が高く、保育士がADHD、LDについての認識が高いことが明らかになった。

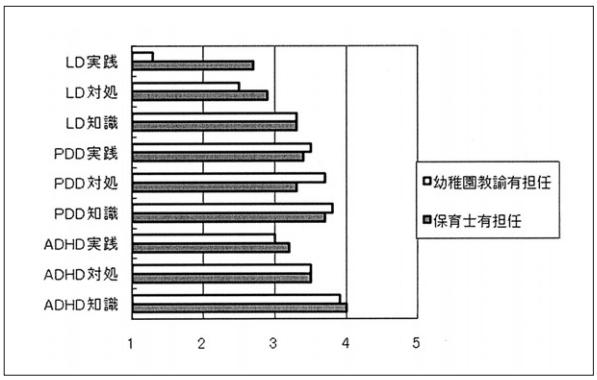

図１　保育士・幼稚園教諭（担任有り）の発達障害の行動特性の理解と実践

６　発達障害特性の状況

保育士・幼稚園教諭が担任する発達障害特性をもつ子どもについて最近の状況をたずねた５段階評価で平均４（少し当てはまる）以上の項目数を保育士と幼稚園教諭で比較した。

(1)保育士:注意欠陥多動性障害的特性については、不注意症状を6項目のうち、４項目（細かいところまで注意が払えない、遊びに集中できない、話しかけられているのに聴いていないように見える、指示に従えず､最後までできない)が平均4以上であった。多動性･衝動性症状は４項目中、１項目（順番を待つのが難しい）のみが平均４以上であった。広汎性発達障害的特性については、意思伝達の質的障害の３項目には平均４以上の項目は無かった。対人的相互反応の質的障害４項目中、1項目(協調性が乏しい)が平均4以上であった。行動興味活動の低下・反復的常同的儀式は、4項目中のうち、１項目（特定なものに執着がある）が平均4点以上であった。

(2) 幼稚園教諭：不注意症状６項目のうち、３項目（細かいところまで注意が払えない、話しかけられているのに聴いていないように見える、指示に従えず最後までできない）が平均４以上であった。多動性・衝動性症状4項目中のうち２項目（意味もなく席を離れる、順番を待つのが難しい）が平均４以上であった。広汎性発達障害的特性については、意思伝達の質的障害の３項目のうち､1項目（場面に関係なく声を出す）が平均４以上であった。対人的相互反応の質的障害4項目中うち２項目（球技やゲームをするときに仲間と

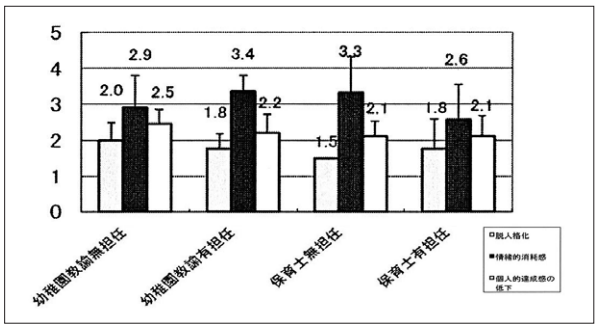

図２　保育士・幼稚園教諭の
担任別バーンアウト指数の比較

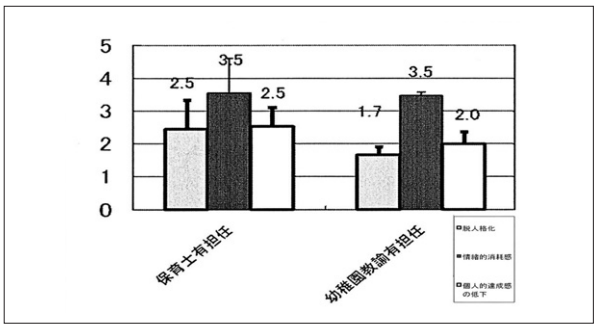

図３　発達障害の診断を受けた子どもを担任する保育士、
幼稚園教諭のバーンアウト指数の比較

協力できない、協調性が乏しい）が平均４以上であった。行動興味活動の低下・反復的常同的儀式４項目中のうち、３項目（得意と極端な不得意がある、自分なりの独特な日課や手順がある、特定なものに執着がある）が平均４点以上であった。

７　発達障害特性がある子どもの保護者の状況とその特性について

設問「その保護者の方は教育・保育に非協力的である」「その保護者の存在は、先生にとって精神的な負担である」に対し、保育士と幼稚園教諭それぞれ１名が「すこしあてはまる」と回答した。その保護者はいずれも母親であった。その保護者の行動特性についての回答によると、幼稚園教諭は、広汎性発達障害的行動特性のある子どもの母親は注意欠陥多動性障害的行動特性があると感じていた。保育士は、子どもも親も注意欠陥多動性障害的行動特性があると感じていた。

９　日本語版MBI（バーンアウト尺度）

保育士・幼稚園教諭のバーンアウト指数を担任の有無を加味して４群に分けて比較した。担任を持っている幼稚園教諭のバーンアウト指数が担任を持っている保育士より高かった。

保育士の無担任と幼稚園教諭の有担任は、情緒的消耗感の点数は高いものの、脱人格化の点数は低かった。個人的達成感の低下はどの群も同様の点数であった。幼稚園教諭の無担任と保育士の有担任が情緒的消耗感に比して、脱人格化の点数が高かった。（図２）

対象を発達障害の診断がついている子どもを担任する保育士と幼稚園教諭に限定して、それぞれのバーンアウト指数を比較すると全項目で保育士が高く、特に脱人格化でその傾向が著明となった。（図３）

〈考察〉

発達障害特性のある子どもとの有無は、保育士・幼稚園教諭ともに担任している子どもに発達障害特性を感じる子どもの割合は保育士91.7％と幼稚園教諭で81.8％存在することが明らかになった。これは国立特別支援教育研究所の調査[7]で示された保育所の83%および幼稚園の79.8%に配慮児（個別的な配慮・支援・工夫を要する幼児）が存在するという結果と今回の調査結果は同様の結果であった。保育や幼児教育の現場で発達障害特性をもった子ども達が一定の割合で存在することは地域を越えて普遍的な事実であることを示すことが出来た。今回の調査では発達障害特性のある子どものうち、診断がついていない子どもが半数いた。診断のついているものの診断名は広汎性発達障害が多く前調査等[7][8]と同様の結果であった。加配制度の利用状況は、障害児加算制度が確立している保育所の方が充実しており、制度上の差が実際の現場の実態にも反映されている様子が明らかになった。

発達障害特性のある子どもに対する負担感については、９名中７名と多く幼稚園教諭が負担感を感じていたが、その程度は軽かった。一方、保育士で負担感を感じる者は11名中５名と半数以下であったが、強い負担感を訴えるものが２名存在した。多くの幼稚園教諭が負担を感じる理由として、幼稚園の本来の業務が教育課程中心の指導であるため、PDDやADHDの子ども達に必要な基本的生活習慣の自立に向けた生活レベルの指導は馴染みがなく、そのために負担を感じている可能性があると考えた。郷間[3]は、近畿地方の公立および私立の保育園保育士186 人と幼稚園教諭31人, 計217 人を対象にした調査で指導上の問題として、「指導の具体的方法がわからない、行動に問題があるため見守りを欠かせない、障害なのか性格的な行動か区別がつかない、診断がついていないので対応がわからない、診断がついていないので加配が申請できない」ことを上げている。幼稚園教諭に限らず、保育士も生活レベルで個別性の高い支援的な対応に苦慮している

様子が伺えた。

保育士・幼稚園教諭の発達障害の行動特性の知識・対処方法･実践については、学習障害に対しての対処･実践が保育士・幼稚園教諭とも低かった。義務教育前であり学習成果・評価が求められない時期であるからだと考えた。注意欠陥多動性障害特性に対しては、幼稚園教諭・保育士ともに知識はあるが、具体的にどのように実践すれば良いか苦慮している実態を明らかに出来た。注意欠陥多動性障害の状態像である「動きが多くて落ち着きがない」「指示に従わない」「衝動的な行動に出る」は、集団保育・教育の中で顕著化するため、「個別の指導・支援」の必要性は理解できても、集団指導の中でどのように実施すればよいかの部分で困難さを感じている様子が伺えた。保育所・幼稚園に対しても義務教育の学校と同様に、巡回相談員や特別支援教育コーディネーターなど専門化チームとの連携が求められる。

気になる子どもの発達障害特性の状況ついて、保育士は広汎性発達障害の行動特性である「行動興味活動の低下、反復常同的儀式、対人相互反応質的障害・意思伝達的障害」についての認識が、いずれも幼稚園教諭に比べ低かった。教育機関として研修の機会が多い幼稚園教諭との差が出ていると考えた。平成20年度保育指針の改訂で保育所が教育機能を持つことが明記された。保育士においても、発達障害特性理解等の研修の参加機会と強化が望まれる。

発達障害特性がある子どもの保護者の状況については、保育士へ負担要因の一つとして当初予想していた保護者に対する負担感は今回の対象者では保育士・幼稚園教諭とも1名と少なく保育士・幼稚園教諭間の差を認めなかった。

バーンアウト状況については、当初子どもに関わる時間が長く親との接触の多い担任を持つ保育士のバーンアウト指数は幼稚園教諭に比べて高いと予想したが、幼稚園教諭に比し指数は低かった。しかし、発達障害特性のある子どもを担当している保育士と幼稚園教諭に限定して比較すると保育士の方が全て（脱人格化･情緒的消耗感･個人的達成感の低下）の領域でバーンアウト指数が高かった。特に最も重篤なバーンアウト状態と想定される脱人格化でその傾向が著明であったことは、発達障害特性のある子どもを担当する保育士は強い保育に対する負担感や保育困難感を感じていることを示唆している。宗像[9]は、教育職の女性にストレス傾向が高く、これは「教育・保育職の特徴である対人的専門職であること、研修体制が確立されていない、教育・保育に対する強い期待がある、教育保育方針の決定権が曖昧、閉鎖的な人間関係」などが影響しているとことを示している。村田[10]は、ストレス症状の背景要因分析を行い、「努力しても報われない無力体験、その子どもに対する負のイメージ、自らの保育指導技術の不安、周りからのサポートの量の不足、情緒的支援者」とストレス状態の相関が高いことを示している。

今回の調査では、発達障害特性のある子どもの割合は国立特別支援教育研究所[7]の調査同様に保育所の方が高かった。加えて発達障害特性のある子どものうち診断のついている子どもの割合は保育士の方が高かった。発達障害特性のある子どもの頻度は相対的に少ない中で、保育士が受け持つ子どもは発達障害の診断がついた種類が多く状態像も多彩であった。幼稚園と違い長時間、0～5歳児の集団保育にある保育士の負担は大きいと予測される。これらのことが、情緒的支援や専門的なサポートが得にくい悪条件とも重なり、発達障害特性のある子どもを担任する保育士が、同じ立場の幼稚園教諭と比較してバーンアウト指数が高い原因の一つだと考えた。

〈まとめ〉

1. 保育士・幼稚園教諭が発達障害の行動特性のあると感じる子どもは保育所・幼稚園に一般的に存在することが明らかになったそのほとんどは、男児であった。
2. 保育士・幼稚園教諭が発達障害の行動特性のあると感じる子どもの約半数が診断を受けおり、広汎性発達障害が多かった加配については保育所が充実していた。
3. 保育士に発達障害特性のある子どもへの負担感を強く感じるものがいたが、対象児に発達障害特性を感じる項目数は幼稚園に比べ少なかった。
4. 保育士･幼稚園教諭の発達障害の行動特性の知識･対処方法・実践については、注意欠陥多動性障害では幼稚園教諭・保育士ともに知識がある割に対処の実践が困難な様子が伺えた。
5. 発達障害特性のある子どもに対する負担感は幼稚園教諭に多く存在した幼稚園教諭は教育課程中心の指導であるため、ADHDを中心とする基本的生活習慣の自立に向けた生活レベルでの指導に負担を感じると考えられた保育士は元来、基本的生活習慣を整える養護機能が職務であることから、生活レベルでの指導対処・実践認識が高いため、負担感が少ないものと考え

られた 。

6. 保育士へ負担要因として当初予想した保護者に対する負担感は少なく、保護者の特性でも、幼稚園と保育所で差を認めなかった。

7. バーンアウトについては、担任を持っている幼稚園教諭のバーンアウト指数が担任を持っている保育士より高かった保育士の無担任と幼稚園教諭の有担任は、情緒的消耗感は高いものの脱人格化の点数は、低めであった。しかし、発達障害の診断を受けた子どもを受け持つ保育士のバーンアウト指数は、同様の幼稚園教諭より高く、同じ診断を受けている子どもを受け持っていても保育士の疲弊感が明らかになった。

参考文献

１）文部科学省「平成19年度特別支援教育体制整備状況調査結果について」平成20年3月25日答申
文部科学省HP（2009年12月17日検索確認）
http://www.Eext.go.jp/b_Eenu/houdou/20/03/08032605.htE

２）池田友美他：保育士における発達障害の行動特性をもつ子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究，小児保健研究，Vol66，No6，（2007）

３）郷間英世他：幼稚園教諭・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難感についての調査研究，京都教育大学紀要　第113号（2008）

４）大阪府こころの健康総合センター監修：「ええやん　ちがっても～広汎性発達障害の理解のために～」大阪府健康福祉部障がい　保健福祉室発行
http://kokoro-osaka.jp/dl/pdd/pdd_adult_dl.htEl
（2009年12月17日検索確認）

５）田中康雄：大人のAD/HD　講談社，（2009）

６）久保真人：バーンアウト（燃え尽き症候群）－ヒューマンサービス職のストレス、日本労働研究雑誌　No558/January　（2007）

７）後上鐵夫：乳幼児期からの一貫した軽度発達障害者支援体制の構築に関する研究～幼児期における発見支援システムの実態調査を中心に，国立特殊教育研究所，（2007）

８）障害児支援の見直しに関する検討会（第4回2008）（第10回2009）資料

９）宗像恒治：ストレス解消学，小学館，（1995）

10）村田務：保育者のストレス状況とその要因，白梅学園短期大学紀要　第32号（1996）

11）文部科学省新教育システム開発プログラム「幼稚園等における発達障害支援教室研究」平成18年度研究成果報告書